

令和6年1月26日

二宮町教育委員会議録

(定例会・臨時会)

二宮町教育委員会

1 開 会 時 間 9 時 3 0 分

2 閉 会 時 間 1 1 時 1 0 分

3 教 育 長 名 森 英夫

4 署 名 委 員

5 教育長及び委員

出欠席	職名	氏 名
○	教育長	森 英夫
○	教育委員 教育長職務代理者	岡野 敏彦
○	教育委員	藤原 直彦
○	教育委員	杉本 かおり
○	教育委員	古正 栄司

6 出席者氏名	教育部長	椎野 文彦
	教育総務課長	田嶋 卓司
	教育指導担当課長	倉重 成歩
	生涯学習課長	山下 昌志
	教育総務課課長補佐	高谷 松慶
	教育総務課指導班長	安藤 通晃
	教育総務課教育総務班長	高橋 梓
	教育総務課教育総務班主査	添田 理代

7 傍 聴 者 1 名

8 調 製 者 教育総務課教育総務班主査 添田 理代

1 開会宣言

(教育長) 令和5年度1月定例教育委員会議を開催します。

2 署名委員の氏名

杉本委員を指名する。

3 教育長事務報告

(教育長) 教育長事務報告を資料に基づいて行う。

(教育部長) 1月政策会議結果報告を資料に基づいて行う。

(各課長・指導主事) 各課の事務報告・事業予定・研修内容について資料に基づいて説明する。

○(岡野委員) 施設一体型小中一貫教育校設置研究会から5月に提言書が提出されると思いますが、それを受けて、今後どうするのか考えは決まっていますか。

○(教育指導担当課長) 内容によっては、今後検討していく必要があると考えていますが、現時点で明確に決まっています。

○(岡野委員) 提言書の責任を果たすためにも、コンセプトやシナリオを来年度の計画や方針に入れ、具体的に何をすべきかを考えておく必要があると思いますので、検討をお願いします。

○(教育長) 提言書については、内容はもちろん検討しなければならないですが、諮問委員会などに移行する必要もあると思いますので、今後検討していきたいと思います。

栄養士が学校で食育授業をしているので、状況の説明をお願いします。

○(教育総務課長) 最近では一色小学校へ出向き、授業や昼休みなどに献立に対する栄養価の説明などを行っています。山西小学校からも要望があり、来週の月曜日に実施する予定です。

○(岡野委員) 生涯学習課のニュースポーツのイベントは、今後も継続をしていただければと思います。パラリンピックの競技や日本では競技人口が少ないけど、世界中で広まっているスポーツを子どもたちに知ってもらうことは大事だと思います。また、実際に体験してみることは必要です。

○(教育長) 学校でも、ボッチャなどを体験していると聞いています。今後も、そういった体験ができればと思います。

5 報告・協議事項

(1) 令和6年度教育委員会基本方針について

(教育総務課長) 令和6年度教育委員会基本方針について資料に基づいて説明。

〔全体〕

- （指導班長） 2－①の KPI『話し合いを通じて自分の考え方の広がり、深まりを感じていると回答した児童生徒』の数値については、今町が取り組んでいることとかなり関連性が高いと思い設定しました。ただ、指標に用いている全国学力・学習状況調査は小6と中3を対象として4月に実施するため、町全体の特徴より、その学年の特徴が色濃くでてしまう傾向があります。したがって、その学年の状況によって、上下する数値ですので、けっして低くないが、次の年の中学校中間値はやや下がっています。その数値は、今取り組んでいることを評価する指標値として、課題があったと考えています。これと全く同じ質問を小学校5年生から中学校3年生を対象に12月に実施しています。その数値を採用することで、町全体の特徴が分かり、5年間かけて成熟度合を見ることができると考えてます。来年度の指標値を町が行っている調査に変えていった方がより特色が出て、取り組んでいることの成果が見やすいのではないかと考えています。
- （教育指導担当課長） 1－①の KPI『中学3年生の英検3級取得率』について、基準値が42.6%と高い数字ですが、新型コロナウイルス感染症が流行し、英語検定中止や延期などの影響で、令和3年度に集中して受検が増えたのが要因の一つと考えられます。また、在学中1回、3級のみだった補助を2回にし、3級以上持っている生徒は準2級以上も対象にし、範囲が広がったため、受検する生徒が多かったこと、7割以上の高い合格率があったためと考えられています。令和4・5年度に低くなっているのは、4年のときはまた新型コロナウイルス感染症の流行で全国的に受検率が下がったためです。代わりうる指標として、文部科学省が英語教育実施状況調査を実施しています。その中では、英語検定3級レベルの英語力を持っていると思われる生徒が全体の約5割いると考えられます。そのような状況から受けていない生徒に対して、受検を促すことを考えています。英語の指導部会で先生から啓発をお願いしますが、英語検定3級は多くの子どもにとって初めて取る資格になるため、興味を持ってもらい受検に繋げていきたいと思っています。指標については、全国平均値や新たな指標の検討をしています。
- （藤原委員） 指標は理由を明記し、値を設定し直すのは構わないと思います。どう記載するのか問題はありますが、4年度ではなく5年度を基準に管理していくことの説明を入れれば問題ないと思います。
- （教育総務課長） 1－③の KPI『学校ホームページアクセス回数』は、コロナ禍もあり、ホームページを見る回数が多くなったため、令和3年度がとて高くなっています。令和4・5年度は1万回前後のため、数値を下げることを検討する必要があると考えています。
- （藤原委員） 逆に、コロナ禍で低かったのが上がることもあると思うので、その差を見る必要はありそうです。

〔1－①〕

○（指導班長） 活用頻度は、学校間や学年によっても当然差はあります。子どもも先生も積極的に使うことで、質は高まっていくと考えています。どこかのタイミングで質が高まる時期は来ると思います。積極的な活用の先に効果的な活用があるという考えに基づいて、効果的な活用に至っていないケースは、声かけをし、積極的な活用を進めたいと考えています。教員及び学級がどのカテゴリーに入るのか4つに分けて整理して考えてみました。AとBは、引き続き積極的な活用を進めていかなければならないと思います。CとDは積極的な活用から効果的な活用に進めていく段階です。状況に応じて、ICT 支援員が、効果的な活用、積極的な活用をサポートしていく連携体制が必要だと考えています。各校各学年で活用が大きく進まない事態にならないよう、AにはAにあった対応というように、A B C Dのそれぞれにあった対応を進めていくことが大事であると考えています。

使い方講習や事例共有をどこまでやっているかは、具体的には把握できていませんが、各校がOJTの形で実施していると聞いています。毎年夏休みに実施している初任者研修では、ICT 支援員を講師として、アプリの具体的な利用について今年度から取り扱っています。学校での好事例は、教科ごとになりますが、ワーキンググループのクラスルームを通じて情報が共有されています。小学校の教科書が来年度改訂されるため、指導内容も大きく変わり、年間指導計画を大幅に見直さなければなりません。年間指導計画をクラウド化し、皆で共有し、自分が行ってきた実践をリンクさせることによって、ICTの活用とカリキュラム研究を結びつけながら進めていければと考えています。

ICT 支援員活用については、当初は、校務支援が主でしたが、最近は授業支援の割合が非常に高まっています。ICT 支援員が先生と関わるだけでなく、子どもに対して支援する機会が増えているのがここ1～2年の傾向です。ICT 支援員をどう使うか、どう効果的に活用するかは、授業者がどんな授業をしたいのか、どんな力を身につけさせたい、どんなアイデアを持っているのかが大事になります。そういった思いがないと、ICT 支援員もどうサポートしていけばよいのかが分からず、生成AIの活用と似ていると思います。何をさせたいのか、どんな授業を作りたいのかが改めて問われていますので、教員の授業力向上に引き続き取り組んでいく必要があります。好事例を5校で共有できる仕組みを作っていかなければならないと思っています。1人のICT 支援員が5校を巡回しているため、横他校へ展開しやすいと思っています。また、ICT 支援員の効果的な活用な事例として、先生が音読をメタ認知させて、自己調整を図れるような学習を進めたい、そんな授業を進めたいと考えたときに、自分の音読を自分で聞き、自己調整を図るアプリを紹介してもらい、子どもたちへの使い方もサポートしてくれるケースがありました。二例目は、国語のスイミーの世界をプログラミングで作ってみたいとなったとき、ICT 支援員からビスケットであれば、スイミーの世界を表現でき、他学年の児童にも遊んでもらえる、という支援をしてくれました。三例目は、自分が撮影した写真を使ってプレゼンテーションしたいときに、ICT 支援員がフォルダ管理の仕方を教え

てくれます。撮った写真がどこに保存されているのかを自分で分かるようになるので、プレゼンテーションを作る際にも役に立ちます。先生は、子どもたちにこういう課題があり、こういう力をつけていきたい、というスタートとゴールを明確に描いた中で、ICT 支援員がサポートしてくれると良い授業がデザインされていていくと感じています。ICT 支援員にはそういった関わりをたくさん積み上げていってもらえればと思っています。

- （藤原委員） ICT については、積極利用と消極利用のセグメントは良いと思います。消極的な行動に対して、積極的な行動になるように、A と B にどんなことができるのかを伝えていくのは大事なことです。積極的な行動について、効果的なフェーズでインプットするのか、D の積極的な行動と思い、好事例から全体を引っ張ってもらうのかです。
- （岡野委員） C と D の積極的な行動には他にないような工夫が盛り込まれていると思います。見極めが難しいですが、大事なポイントになります。
- （指導班長） D には好事例を出してもらい、A B C にいかに生かしていくのかになります。学習指導要領内容もよく理解し、どんな授業をしたいのかイメージできている教員に ICT 支援員の手法が加わることで、良い事例を生み出しています。
- （岡野委員） C がやっていくうちに、D に移っていくとよいです。
- （藤原委員） C は支援が届かなくても、D の好事例を含めてインプットしていくと、C がだんだん寄っていくのではないかと考えているため、全体にインプットしなくてもいいのではないかと思います。
- （岡野委員） A は次に C と B の 2 つのルートのうち、どちらに移るのがいいのでしょうか。
- （藤原委員） B の方が行きやすいのではないかと思います。
- （岡野委員） いずれのルートでも、右上を目指してもらいたいです。

〔1－②〕

- （指導班長） 何をすると楽しいという回答が上がるのかは非常に難しいです。学級担任をしていたときに感じたことは、教員が思う楽しさと子どもが思う楽しさを共有しなければならないと思っています。自分だけが楽しいと思う楽しさは、相手が求める楽しさではないので、それが上がった時に高評価となるのかということ、そうではないと思っています。学校は、子どもたちを楽しませる場ではないと思っています。学級担任のときは、「楽しい」と「楽しむ」は違うことを必ず説明していました。誰かに期待して楽しさを求めるのではなく、自分たちで楽しい空間を作る、自分たちの力で楽しさを見出していくことが大事だ、と話した上で、1 年間の学級経営をしていたことを思い出しました。そもそも、学校は何をしたらいいかという議論に戻りますが、楽しさは全ての学級、学校で共有していくことが大事だろうと思っています。何をすると上がるのか

は難しいですが、そのような取り組みをしていかなければならないと思っています。

- （藤原委員） 『学校に行くのは楽しいと回答した児童生徒』について、会社でも買いたいですかと質問すると、買いたいだと回答があっても、実際に買うのかというと買わないこともあります。楽しいですか、と聞くよりも、楽しくないことを減らすために、楽しくないことは何なのかを聞いて、対策をした方が上がってくるかもしれません。
- （岡野委員） できなかったことができるようになるとき、その途中は苦しいですが、できた時の達成感や充実感も楽しさの一部だと考えられます。子どもたちが感じる楽しさは何かを考え続けていくべきだと思います。指標に関しては、試行錯誤しながら、色々考えていく必要があります。
- （教育指導担当課長） 『地域の大人から授業や放課後等に勉強やスポーツを教えてもらった児童生徒』は、全国学力・学習状況調査の設問にあったのですが、令和5年度に削除されました。文部科学省によると、この設問は完全な削除ではなく、数年単位で出す設問のため、何年後かには出る予定ですが、いつなのかは言えないそうです。これに代わる質問も今のところないため、新たにアンケート等で指標を入れるのかどうかを考えています。

〔1－③〕

- （教育総務課長） 『LINEでの発信を検討していることを、今後の課題の欄に追記しても良いのではないか』については、中間評価の今後の課題の欄に入れることも検討しましたが、来年度の基本方針に反映するわけではないため、資料のとおり、『令和6年度中に町の公式LINEが導入される予定なので、内容を活用した情報発信について検討を進めます。』を加えることを検討しています。LINE導入の計画が、今の段階だと学校で使えるようになるのが年明けになる可能性があるため、このような記述にしました。

〔2－①〕

- （指導班長） 不登校児童生徒数は、問題行動等調査の結果から年々増加傾向にあることが、資料から見てわかると思います。増加している理由は、一人一人状況が異なるため、これが理由ですと言いつけることは難しいです。ただ、傾向として3点あります。1点目は、学校復帰という短期的な結果だけを求めるのではなく、長期的な視野に立ち、社会的自立を求めていくよう国の通知が出され、不登校支援の方向性が変化しています。2点目は、保護者の学校教育に対する考え方も変化してきています。多様な選択肢が増えてきている中で、学校が全てではないという考え方も出てきています。3点目は、理由としては一番多く、本人の状況、気持ち、気力などにより、どうしても学校に馴染めないというケースです。それぞれ単体ではなく、複合的な理由として不登校になっているケースが多いです。ただ、低学年はこの3点に加えて、母子分離の難しさのあるケースが多く、中学年・高学年にはあまり見られない理由です。この場合、保護者と

離れることが難しいため、学校に保護者も一緒に来てもらう、学校で一緒に過ごしてもらうことで、学校生活で滞在できる時間を増やしていくというのが現状の支援になります。こうした状況に対して現在行っていることとして、一つ目は、本人と保護者支援を進めています。選択肢を増やすために、やまびこ、フリースクール等の連携を深めていくこと、校内に様々な居場所機能を充実させていくこと、そこにスクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー等の専門職が学校に常駐できる時間を増やすことで教育相談体制を強化していくことです。県の取り組みにもなりますが、子どもの困り感をこちらから積極的にキャッチしていく取り組みです。低学年は保護者との連携が非常に大きいので、保護者が相談しやすい体制や学校に居やすい体制を作っていかなければならないと思っています。二つ目は、就学相談と幼保小連携の充実です。就学相談では、子どもにとって一番安心できる学びの場と一緒に考えながら進めています。幼稚園保育園、保健センターとの連携は必要と思っています。また、幼保小の連携による引き継ぎは、引き続き行っていきたいと思っています。居場所機能の一つとして一色小学校に用意したほっとルームには、全校児童が160名いる中で、延べ19名の児童が利用しています。全児童の10%以上がこの部屋と繋がり、繋がることで不登校にならないで済んでいるケースもあります。こうした居場所の効果はあると実感しました。また、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーによる家庭訪問や学校での丁寧な相談に乗って、今まで登校できなかった子が登校することができるようになったケースも複数あります。今後の対策として、県への人的拡充の要望は出していきたいと思っています。現在、様々な加配要件がありますが、不登校の児童生徒が増えてくる中で、まだ不登校支援に関する加配メニューが無いと聞いています。町として、一色小学校のほっとルームを他校にどう広げていくかは、学校と相談しながら研究していかなければなりません。また、学校で過ごす時間の大半が教室の授業時間になりますので、魅力ある授業づくりを行っていかなければいけないと思っています。教室で居づらさを感じる子どもたちも年々増加傾向にあり、国の報告でも、教室に8.8%、発達障害の子がいるという報告もなされている中で、特別支援学級の担任だけではなくて、通常学級の担任にも特別支援対応スキルは求められていますので、こうしたスキルが身につくような職場内や自治体での研修を行っていかなければいけないと思っています。教育相談体制の機能の充実にも関わりますが、子どもが悩んでいると、当然保護者も同じように悩んでいるケースも多いので、保護者に寄り添った支援等を行う必要があります。選択肢を増やすという意味で、前回の教育委員会で報告させていただきました通級指導教室の拡充についても、進めていきたいと考えています。

- （藤原委員） 不登校について、低学年が増えているから低学年向けに対策をと話しましたが、母子が離れにくいという理由がありますが、低学年に向けて何か対策というよりは、全体に対してちゃんとやっていくことが分かりましたので、取り立てて低学年向けに何か書く必要はないし、しっかりと全体が下がっていく、それが二宮の教育委員会

としての戦略だということで良いのではないかと思います。

〔2－①〕

- （教育総務課長） 教師の時間外の間値は、資料のとおりです。中間値では4月から12月としました。小学校が基準値 35.8 時間に対して、令和5年度は 33.9 時間。中学校が 75.5 時間に対して 62.6 時間です。

〔2－②〕

- （教育総務課長） 令和5年度から、地場産デーを学期に1回を目途に実施し、玉ねぎ、サツマイモ、菜の花等を提供しています。回数については、毎年同じものが採れる中で、8回が9回になるなど回数に大きな変動が見られるものではなく、給食運営委員会で、説明して詳細を理解するのは難しいと考えられるため、何の数値で評価していくのかは検討する必要があります。

〔3－①〕

- （生涯学習課長） 先ほど教育指導担当課長から説明にあったように、全国学力・学習状況調査で設問廃止の経緯の説明がありました。単に廃止するのではなく、未来を担う子どもたちの成長を支えるという意味で、二宮町では放課後子ども教室で地域の大人たちに見守ってもらい、スポーツや読書など様々なジャンルを放課後子ども教室の中で展開しています。放課後子ども教室の実施回数については、運営に協力していただいている方を考えると、今現在としてはちょうど良く、この回数がベストだろうと思っています。夏の実施は、非常に高温になるため中止になってしまうケースもあるため、子どもたちがより参加しやすいような形で、地域学校協働活動推進員と開催時期や運営方法で工夫を重ねながらやっています。ここでの KPI は、より子どもたちが参加しやすいことで、登録率を上げていく指標を設定しました。基準値の令和4年度は登録率 36.4%、令和5年度は新型コロナウイルス感染症から回復傾向になったこともあり、中間値 41.9%になっています。ただ、100%を目指すのは難しく、5・6年生になると、放課後子ども教室に参加せず、自分たちで居場所を見つけて遊ぶことを選ぶ子どもが多くなるため、今の実態としては、4年生以下が多い状況になります。できるだけここに集まって地域の大人たちから、学習を教えてもらえるような環境づくりを進めていきたいため、この KPI にさせていただきました。

〔3－③〕

- （生涯学習課長） 情報発信の強化については、生涯学習課の事業の取り組みを地元情報誌に7回掲載された、10月までに町 Facebook に16件投稿した、と記述してしまったことで、藤原委員から KPI を Facebook の『いいね』で見えていくのかのかがどうとなりました

が、ここの KPI で設けているのは、地元情報誌に取り上げられるのを 14 件の目標にして、現在 7 件掲載されています。積極的に情報発信しているという意味で、10 月までで Facebook を 16 件投稿している、と記述しました。理由として、この KPI は、これまで通り記者発表などで対外的に発信していくことで、地元情報誌に取り上げてもらい、取材に来ていただく回数を増やしていきたいため、参考値として、Facebook16 件、令和 4 年度は 25 件上げていました。今年度は 12 月までで 27 件上げています。今までの生涯学習課の Facebook の上げ方はイベントの告知がメインだったのですが、イベントの告知だけではなく、町民の皆さんに生涯学習課でやっていることを知ってもらうために、例えば、ラディアンテニスコートは以前とても黒ずんでいましたが、高圧洗浄機で汚れを落としたりとても綺麗な緑に復活しました、青空と緑のコントラストでテニスをしませんか、のように皆さんに興味を持ってもらえるような投稿をしました。町立体育館のトレーニングルームも利用者をどんどん増やしていきたい中で、大きな設備は置けませんが、大きなバランスボールやちょっとしたフィットネスができるようなものを置くことで気軽にトレーニングできるような環境を作りました、というような形でやっています。『いいね』の数を見ることについては、投稿したことによって、どんな人が『いいね』してくれたのか、この投稿に対して『いいね』してくれた人がこっちのことも『いいね』にしてくれるんだね、というような形で、内々で分析のようなことはやっていたりします。情報発信の強化については、これから LINE の導入とか見込まれていく中で、町民の皆さんとより近づいた関係で情報を提供できるよう、行政用語をなるべく使わずに、気軽なフラットな形で情報発信をやっていくことで皆さんが受け入れやすいような情報発信をこれから努めていきたいと思っています。

- （岡野委員） 放課後子ども教室については登録率で示すのも良いと思いますが、去年の延べ 2,000 名を超えているのはインパクトがあり伝わりやすいのではないと思っています。例えば、Facebook などの情報発信で伝えることで、自分たちでやったことの成果は 2,000 人を超えているんだ、と地域の方の参画意識にも繋がっていくのではないかと思います。1 つ 1 つの KPI が単独で存在しているのではなく、繋がっていくような関係にもなっているので、そのあたりを意識していくのが良いのではないかと思います。

- （教育総務課長） ご意見いただいた部分を 2 月 9 日の方針案としてお示しします。その後再度ご意見いただき、反映をしてお示ししたいと思っていますので、よろしくお願いします。

－ 次回教育委員会予定 －

（教育総務班長） 次回教育委員会議の日程及び出席を要する主な行事について説明。

4 付議事項

(1) 議案第19号 二宮町立小中学校特別教室等空調機設置工事請負契約の変更について

- 非公開 -

(2) 議案第20号 令和5年度二宮町教育委員会表彰被表彰者の選考について

- 非公開 -

11時10分 閉会